

山東京伝 「山東京伝書簡」 (『曲亭来簡集』 2)

雨故少々残暑去候様

存候。益御康健御座被遊

恭悦奉存候。然は

正字通 一冊

長々拝借仕置難謝

尽奉存候。今日返上仕候。

御落手被遊可被下候。且又

度々わつらはしく相願、恐入

候得共、

史記始皇紀 一冊

右拝借仕度候。先達而は

御本箱あきかね候よし、

其節も御手を尽し被下

候よし、御厚志多謝奉存候。

御子息様御旅行にも

さそく御物入等もあるへきに、

よく御手廻し被遊感入候、

私などいつも一舛のふくへのうち、

減し候とも増りは不仕、わつらはしき事

のみにて御座候。

あまり御他行不被遊 (破損) ■ ■ よし、

御尤奉存候。私なとも近 (破損) ■ ■

耳目心気ともに漸々おとろへ

候様にて、著述などの心は

少しもなく候得とも、これもせねは

ならぬせつなし業と存候へは、

ますくゝいやに相成候。好古の

癖故、随筆などは少し

たのしみにも相成候へとも、これは

手間斗り懸りて、かへつて囊

中のためあしく、両様よき

事はとかく無御座候。若年の

比老後をおもはず、苦行せさり

しを後悔のみ仕候。身体

おとろへては何事も心にまかせず候。

老兄などはお子様方も多く

お持被成候へは、御老後の御たのしみも

多と存候。御保養專一に被遊、

御長寿之御手段可被遊候。

私などは子なき事第一の

後悔にて御座候。かく楽屋を

御はなし申上候人は外になきゆゑ、

おほえすなか事

心やりのみにて御座候。

時分から御繁用と存候へは

御返書に不及、くれぐれも御とめ申上候、

少し涼気に相成候は、

参上、万々可申上候。頓首

曲亭先生 京伝